

2023年1月8日 主日礼拝 二十歳の感謝のとき

説教題「託されたタラントン」 マタイ福音書 25 章 14～30 節

主任牧師 加藤 誠

「忠実な良い僕だ、よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」(マタイ福音書25章21節)。

「成人」の年齢が 20 歳から 18 歳になったことで、昨年までお祝いしていた「成人感謝」をどうしようかと執行委員会で話し合いました。法律に合わせて 18 歳の成人を迎えた若者を招いての感謝の時にすることも考えたのですが、日本の場合、多くの 18 歳の若者はこの時期、受験の真っ最中です。そこで多くの自治体がそうしているように「成人のお祝い」ではなく「二十歳のお祝い」の意味を込めた礼拝にしようということになりました。今朝の礼拝にも、あけぼの幼稚園、教会学校の小学科、少年少女科で育った若者たちをこのように迎えて礼拝できることを感謝します。大井教会が若い魂と関わる機会をこれだけ豊かにいただけていることはほんとうに大きな幸いです。これからの日本、これからの世界にこそ、聖書のイエス・キリストの福音は大切なもの、無くてならないものだと思う時、教会として若い魂と関わり一緒に聖書を分かち合う機会をほんとうに大切にしていきたいのです。

さて今朝はマタイ福音書の「タラントンのたとえ」にご一緒に聴きたいと思えます。主人が長い旅に出るに際し、僕たちに各々「5、2、1 タラントン」の財産を預け、かなり日が経って戻ってきた主人が清算をするたとえ話です。5 タラントンと 2 タラントンを託された僕は、各々 5 タラントン、2 タラントンを「もうけました」と報告して主人に喜ばれましたが、1 タラントン託された僕は「土の中に埋めて隠していた」ために主人から厳しく叱られ、その 1 タラントンを取り上げられてしまい、すでに 10 タラントン持っている者に与えられたのでした。

タラントンというのは当時のお金の単位で、1 日分の日雇い賃金が 1 デナリオンで、その 6,000 倍がタラントンでした。仮に 1 日分の日雇い賃金を 1 万円とすれば、1 タラントン=6000 万円、5 タラントン=3 億円であり、相当な金額です。

この主人から「預けられたタラントンはいったい何を意味しているのか」。託されたタラントンの意味を考え続けること。これがたとえ話の中心でしょう。たとえ話の場合、答えは一つではなく、いろいろ思い巡らし考えてよいのです。一つしか答えがないのなら、たとえで語る必要はありません。「これはこういう意味だ」と説明した方が明快です。けれども主イエスがあえて「たとえ話」で語られたのは、答えを一つに限定せずに、私たちが試行錯誤しながら考え続けることを大切にされたからです。各人が考える。そして、以前はこう理解していたけれど、最近はどう理解するようになった…と解釈が変わっても良いのです。大切なことは自分で考え続けることです。ですから二十歳を迎えた皆さんにも「今日正解が分かった」では

なく、これからの人生の経験を重ねる中で「タラントンとは何だろう」と考え続けてほしいのです。牧師の話は、あくまでも自分が考えるためのヒントであって、「牧師はそう考えたみたいだけれど、自分はこう考える」でよいのです。

さて、このたとえ話の「タラントン」とは何を意味しているのか。一つの解釈として「神さまから預けられた賜物、才能」という理解があります。人は各々神さまから異なった賜物、才能を与えられている。神さまから託された賜物と才能を土の中に埋めてしまうのではなく、神さまのためにささげて用いていこう…と受け止めるのです。また、この理解をもう少し大きく捉えて「タラントンは神さまから与えられた人生そのもの」という理解もあります。何年生きられるかではなく、どう生きたか。神さまの働きのために用いていただくこと大切だ…という理解です。

その一方で、「このたとえ話は、多く持っている人がますます豊かになって、わずかしか持っていない人、お金儲けがうまく出来ない人の財産が取り上げられていく。まるで資本主義的な社会の現実が映し出されているようで好きになれない」という声や、「神さまから頂いた財産は、神さまのために用いましょう…という献金の勧めのための話のようで好きではない」という声も聴きます。

わたしは今から 28 年前、神戸の教会にいたときに遭遇した阪神淡路大震災で、教会と幼稚園が地域の避難所になり、それを契機にホームレス支援に関わるようになった体験から、「タラントンとは神さまが招かれる出会い」と理解するようになりました。というのは、タラントンは「使うと豊かになる可能性」がある一方、「元手も失って大損する危険性」もあるリスクなものではないか…と考えたからです。1 タラントンを託された僕は、そのリスクな面に心が囚われたために、主人の財産を失っては大変だと考えて「土の中に埋めた」のでしょう。阪神淡路大震災の時、わたしは自分から希望して教会を避難所として解放したり、ホームレス支援に関わったわけではありません。いずれもが、半ば、神さまの方から「よろしく！」と強いられ手渡された「出会い」でした。正直なところ、わたしには「リスクなもの」に思えて、恐れや不安の方が大きく、できるならば「土の中に埋めてしまいたい」ものでした。けれども避難所の働きもホームレス支援も「神さまが招いて、私たちに託された出会い」として受け取っていった時、それら「出会い」に込められた「豊かさ」や「祝福」を受け取っていく貴重な体験となったのでした。

このたび二十歳を迎えた若者たちに伝えたいのは、これからの人生で、もし「これが神さまから託された出会いなのかな」と思う体験をしたならば、ぜひ祈りながら思い切って一歩を踏み出し、そのタラントン（出会い）を生かしてみたいということ。神さまが招いてくださった出会いならば、必ずそこには大きな祝福と喜びが用意されていることでしょう。それが主イエスの確かな約束なのです。